

震災の中で方言研究者ができること、なすべきこと

津田 智史 (東北大学大学院生・日本学術振興会特別研究員 DC2)

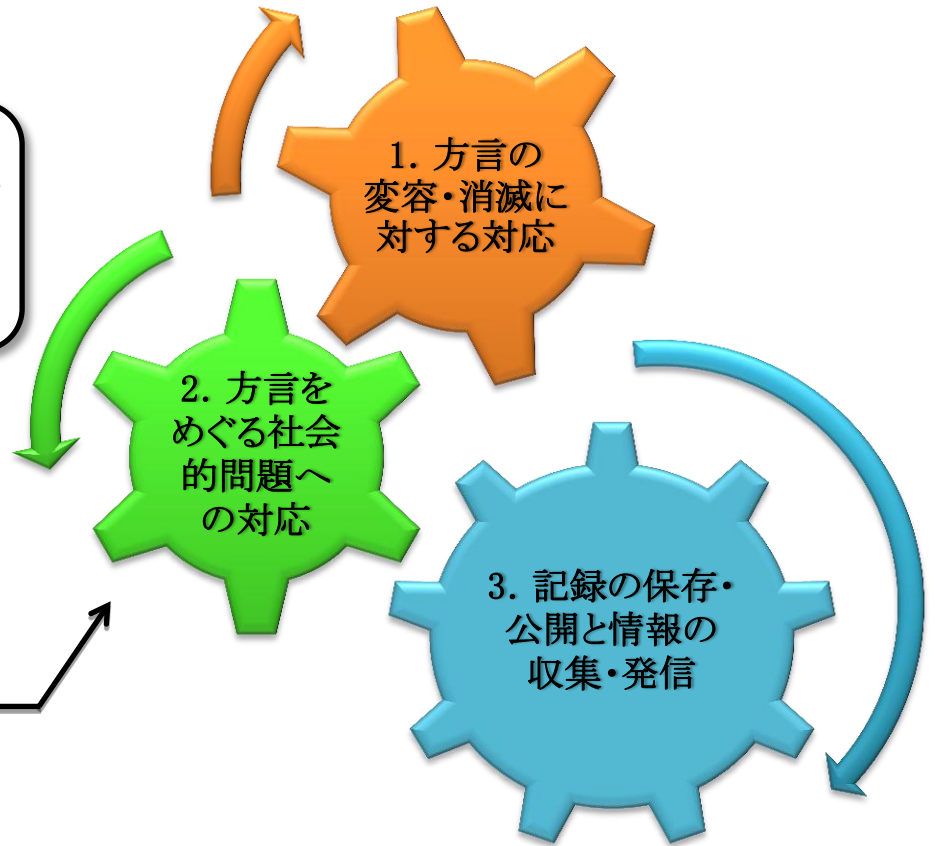
小林 隆 (東北大学)

本発表の目的

被災地域の方言、そして方言話者に対して、方言研究者が取り組むべき課題を全体的に整理し、これからの活動の指針を示す。

東日本大震災が方言学にもたらした課題

1. 方言の変容・消滅に対する対応
2. 方言をめぐる社会的問題への対応
3. 記録の保存・公開と情報の収集・発信



— 上記課題に対する具体的な取り組み —

- ・消えゆく可能性のある方言についての検討
- ・記述的、地理的両面からの記録計画の立案
- ・その準備としての被災地における先行研究の文献目録の作成 (→『東日本大震災と方言』ほか)

1. 方言の変容・消滅に対する対応

(1) 消滅の危機に瀕する方言の学術的な記録

(2) 地域住民の生活語としての方言の継承

(3) 変容する方言の実態研究

- ・生活語としての方言の価値や必要性を検討
- ・地域住民への啓蒙活動
- ・地域一体となった計画の遂行

2. 方言をめぐる社会的問題への対応

(1) 現実的に起こることが予想されるトラブルへの対応

(2) 方言を利用した被災者の激励・被災地の復興協力

・「変異」「変化」をキーワードとする研究の推進

: 共通語化、言語接触、移住と方言、言語習得、言語計画、言語景観など

- ・医療現場で役立つオノマトペ用例集 (→竹田晃子氏)
- ・被災地方言パンフレットの作成 (→「支援者のための気仙沼方言入門」)

(1-1) 被災地におけるトラブルへの対応

(1-2) 避難先におけるトラブルへの対応

- ・方言エール、方言スローガンの検討と、その利用 (→田中宣廣氏、『東日本大震災と方言』ほか)
- ・方言を使った催し物の開催など

3. 記録の保存・公開と情報の収集・発信

- ・収集された方言の記録の適切な蓄積・公開
- ・震災と方言の関連情報を収集し発信するシステムの構築

「東日本大震災:「故郷を離れ定住」
10ポイント増の63%」(毎日 jp)
宮城県気仙沼市から福井県坂井市に移った女性(48)は雑貨店を始めたが「古里の言葉で話せず、仕事に慣れるまでストレスを覚えた」と打ち明けた。折れそうな心を救ったのは、故郷に残った友人らとの電話でのやりとりだったという。(一部抜粋)

方言の
心理的機能

東北大学方言研究センターの今後の活動

①被災地の方言の記録、特に談話資料の収集

上述 1(1)、2(1)(2)の
課題への対応

②被災者の避難先での 言語生活の実態と 言語摩擦についての調査

上述 2(1-2)の課題への対応

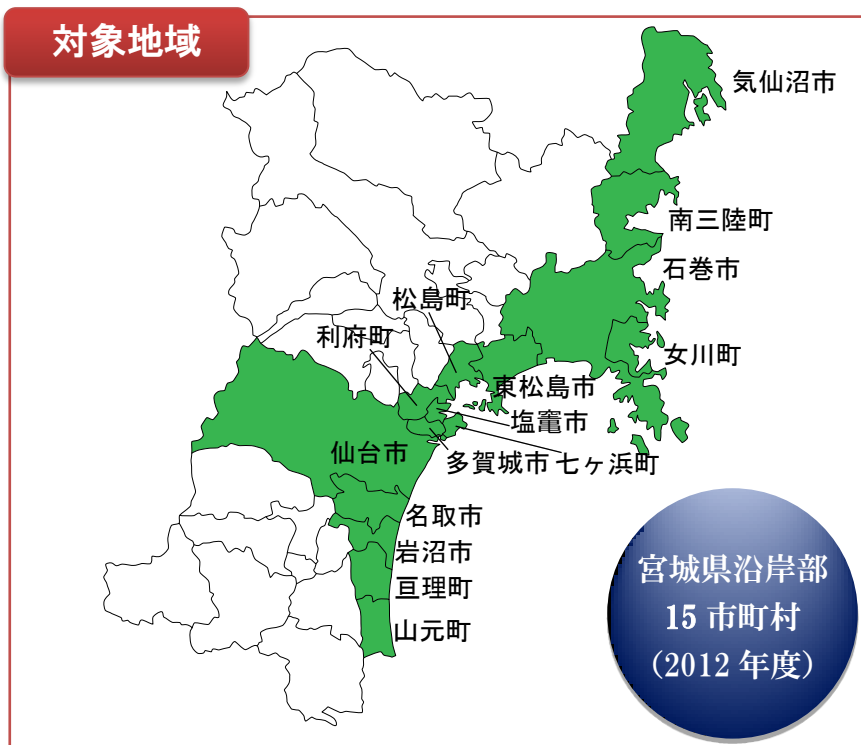
③東日本大震災と 方言に関する 情報ネットワークの構築

上述 3 の課題への対応

中西太郎ポスター発表へ

被災地の方言談話を収録し、
記録と支援のために役立てよう！

①被災地の方言の記録、特に談話資料の収集



談話の内容

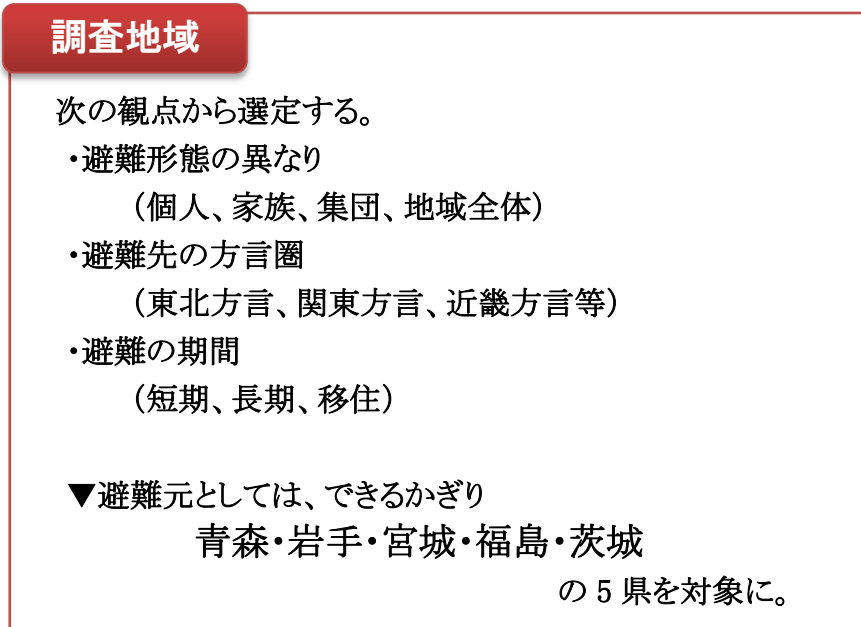
- A. 自由会話(3つの話題を設定)
→震災の体験/地域の伝統文化/方言に対する思い入れ
- B. ロールプレイ会話
→言語行動の種類に基づいて設定(挨拶、依頼・受託・断り、感謝・謝罪、等)

談話資料の公開

- (1) 形態: 録音資料、文字化資料、解説
- (2) 公開: 報告書形式、および、電子データを Web サイトで
- (3) 被災地への支援活動の一環としての工夫
 - ・Web サイト「東日本大震災と方言ネット」に方言会話コーナーを開設する。
→被災者に対しては、ふるさと方言の心理的効果による支援
→支援者に対しては、活動する地域の方言理解のための支援
 - ・支援者向けの方言パンフレットに、現地の会話例として盛り込む。

被災地そのものに集中していた
視線を、避難先へと広げよう！

②被災者の避難先での言語生活の実態と 言語摩擦についての調査



調査内容

- ・避難者の方言使用状況(出身地方言、避難先方言、共通語)、およびそれに関する意識
- ・避難先の住民との方言に関する言語摩擦、およびそれに関する意識
- ・方言を使った言語生活全般における悩みや要望
- ・避難者の方言に対する受け入れ側住民の態度や意識

実態の把握から支援策の検討へ

- ・避難者と受け入れ側住民との相互理解を目指したい。

みなさまへのお願い

被災地の方言談話の組織的収集、全国各地での避難者に対する調査、
そして、情報ネットワークへの情報提供など、ご協力お願いいたします。